

Ⅳ 英語を通しての試み

山 田 雄 一

前述のように、本校高2の研究旅行に関して、総合学習グループのメンバーの各教科において、旅行に関係づけた授業を行うことになった。英語担当の私は、田中先生の御示唆により、「The Songs of Hiroshima、英訳原爆詩集1」（大原三八雄 訳・編、太平出版社）の英訳された原爆に関する詩を、生徒に読ませることにした。

この試みに対して、旅行前の4回分の授業をあてることにした。その第1回目に、まず私が峠三吉の「死」の英訳版をプリントして生徒に配布し、私なりの訳をしながら、原爆、広島に対する認識を新たにさせた。そして、詩とは“心”であり“訴え”であるから、いつもの授業のように、語句や文法にこだわらなくてよいから、“心”と“訴え”を読みとるようにと指導した、事実私の訳も、英訳前の本物の峠三吉氏の原詩とは、大部かけ離れてしまったかもしれないが、私は私の言葉で原爆に対する“心”と“訴え”を訳した、と説いた。

その時間に、生徒を4名ずつグループ分けし、（1クラス11、3クラスで33のグループができた。）それぞれに、一編～二編の原爆詩集からの英訳版のコピーを渡し、それに対して、自分たちの言葉で、自分たちの訳をつけ、感想や解説もつけて、次からの3回の授業で発表させることにした。発表時間は1グループ10分～15分で、まず最初に英訳詩を朗読させ、次に自分たちの訳した日本語の詩を朗読させ、それから各メンバーに感想や解説を発表させた。

かなり難解な英訳詩もあるので、実のところ、どれぐらいの日本語訳詩になるか心配であった。というのは、かつて教科書にのっている詩を日本語に直させた時、詩のリズムや心を全く失わせてしまって、ところどころに誤りのある直訳詩にしかならなかった。もちろん英詩独特のリズムや韻までも、訳出する高等技術など要求はしないが、詩にうたわれている田園風景や、叙情を読みとらせるのにも一苦勞であった。そして詩の授業が終わって出る質問はきまって、「主語は何か」とか、「今の訳だと文法的におかしい」といったもので、うたわれている内容に関する質問など皆無なのだった。

ところが、次からの3回の授業での生徒の発表は、

朗読の英語こそ下手であったが、日本語訳の内容は、原爆に対する“心”や“訴え”が感じられ、文法や語句にとらわれず、詩を読んだという実感があふれていた。英語の授業で本当の英詩を学ぶ時、こちらか、イギリスやアメリカの詩人の解説をしても、あまり反応を示さないような生徒たちか、自ら、峠三吉やその他の原爆詩人について図書館で調べてきたり、詩の中でうたわれている地名や歴史的事実を自分たちなりに調べて解説もしていた。そして何よりも、原爆の悲惨さを、自分たちの言葉で表わしていた。生徒たちの訳詩は、日本語で書かれた原詩と比べると、言葉は全く違っているが、何か同じ“心”、同じ“訴え”であるような気がしたのは、私のひいき目だろうか。

倫社の授業で広島について学び、研究旅行を前にいやが応でも広島についての興味を高めたタイムリーな発表であった。又、本来の英詩と違い背景は日本であり、書いた人も日本人である。原爆や戦争の悲惨さは幼ないころから何度も耳にしてきているだろう。私個人の考えであるが、詩とは“心の原型”を言葉にしたものであり、やはり、英語を、イギリスを知らない日本人か本来の英詩をその言葉通り名訳したところで、すばらしい詩とはなり得ないと思う。その点、この原爆に関する詩に対しては、小さい時から心の中にあった一つの核が、倫社の授業や旅行前の下調べを通してふくらんで、実をつけたのだと思う。そして、総合学習の本質はそこにあると思う。生徒が生まれてずっと持ち続けている核は、ある一つの教科指導で開花することもあろうか、それは極めてまれなこと、やはりいろいろな教科、いろいろな経験を通して実を結ぶものだと思う。それがわかっただけでもこの試みは私にとって有益であった。

研究旅行の第3日目、生徒は広島で、原爆資料館を見学し、館長の高橋氏の講演を聞いた。「生徒たちはみんなで作った、自分たちの心の声の詩集を読んだかな？授業の時、いろいろ話合った感想はどう実を結んでいるのかな？」そんなことを考えながら、私も原爆資料館を見学し、講演を聞いていた。

最後に、生徒の作った“原爆英訳詩集”の“日本語訳詩集”のページを資料として付しておく。

BE BEAUTIFUL, RIVER, FOREVER!

～制作 第9班～

Written by EISAKU YONEDA

It has come back to life again,
So soon, and so beautifully—
The river that flows through the delta.
The streaming waters grow darker and clearer.
Day by day, in its shade,
My child might have been growing :
In the sunset sky, mingled with clouds,
The river burns on in red flames, for ever.

≈Notes≈

- delta [dél'tə] 〔名〕 河口の三角州
- stream [stri:m] 〔動〕 流れる、絶えまなく続く
- dark [dɑ:rk] 〔形〕 暗い、やみの、黒ずんだ
- clear [kliə] 〔形〕 くもっていない、明るい
- day by day 日ごとに、日々
- in its shade 日陰に、人に忘れられて: shade [ʃeid]
- mingle [mɪŋgl] 〔動〕 混ぜる、一緒にする、入り交じる
- in flames 燃え上がって

≈お知らせ≈

このプリントには、班の総力を投入しておりますが、万一、不良な点、お気づきの点が、ございましたら、下記までお知らせ下さい。

第9班 大将 田中雅也 野田研吾 三宅章子 山岡洋子

〔訳〕河よ永遠に美しくあれ

私の内に再び河が蘇って来た。
余りにも速やかに、美しすぎる程に——。
広島平野のデルタを貫き流れ行く河。
絶え間無く流れるその水は、より清らかに、透き通ろうとする
しかし私の内の何か、それを妨げてしまう。
日を重ねるにつれて、人から遠ざけられて、
私の子供は、育って来たのかもしれない。
雲の散らばった、日没後の空を背景に、
河は、真赤に燃え上がるのだ —永遠に—。

〔解説〕

- l.1,2 ここでのitは河を指している。河は、太田川ではないかと思う。ここを訪れようとする作者の心中に河の記憶があざやかに回想される様子。
 - l.3,4 ここでのdeltaは広島平野の三角州。作者の暗い原子爆弾の思い出が、回想の中にはいり込んでくる。本当は、清らかで透き通っていないなければならない河の水も、そうではなくなってしまうのであろう。——grow darker and clearer.の部分から読みとれる。
 - l.5,6 暗い原子爆弾の思い出が、強烈になり、ついに、河の回想がとぎれる。my child,というのは、広島や、被爆患者たちをも指し、それらが、人に忘れられて、生きてゆかなければならない宿命を背負っているということをここで言いたかったのではないか。
 - l.7,8 回想の部分が終わって、河を見ている作者。日没後の空を広島に、そして散らばった雲を被爆者にたとえている。それを代表するかのようになり怒りを訴えて赤く燃え上がる河。この怒りは、永遠に消えないのである。ここでの河は作者自身かもしれない。
- 全般 l.2の——からl.6の:まで回想の部分。この間に、作者が太田川までたどりつく時間が含まれている。又、l.3～l.6の河は回想の中の河、l.8の河は、作者が現在見ている河である。

・尚、このプリントは我々の勝手な解釈によるものですのであしからず。

～では終わります。さようなら

(生徒の作ったプリントの原文のまま)